

授業移行モデル概要

大学で行われている授業は多様であり、その目的や方法也多岐にわたります。

下表は90分授業が100分授業になるときの移行モデルをまとめたものです。いずれのモデルでも100分授業への移行はこれまでの授業を振り返る機会でもあるので、「授業を行うためのヒント」(p.6)をあわせてご参照ください。

移行モデル	概要
再構築型	アクティブラーニングなどの手法を導入し、授業そのものの構造を再構築します。
各回+10分型	14回の授業において、グループ・ディスカッション、演習、小テスト、リフレッシュタイムなどを追加します。
全体+50分型	授業時間が1350分から1400分になり+50分となるので、その50分でできる新たな内容を追加します。
50分×2回型	100分の授業を50分+50分と考え、途中リフレッシュタイムを挟むなどして50分2回の授業とします。
単元再編成型	ひとつの主題を扱う数分から数十分の授業のセットである単元を、100分×14回に当てはめ直します。
複合型	上記の移行モデルを組み合わせます。

授業移行モデル解説

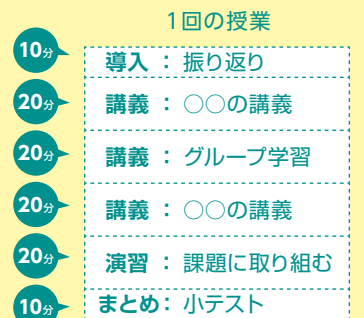
再構築型

○ メリット

学生の集中力は10～20分程度と言われているので、10～20分ごとの単元に授業を区切って構成することが考えられます。それぞれの単元では学習の方法を変化させると学生のモチベーションが継続します。

△ デメリット

90分を講義型で授業を行ってきた場合には新たに授業設計を行う必要があります。



各回+10分型

○ メリット

これまでの授業の前もしくは後ろに10分の新たな学習を加えます。

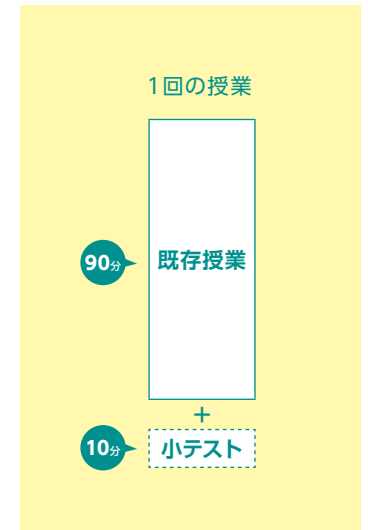
授業の前であれば、その授業で理解させたい問題を小テストなどで確認し、正答率が低い問題に関わる説明を丁寧に行います。

一方授業の後であれば、授業を振り返るための小テストやMind Mapなどを書かせます。こうした思考はリフレクションや省察とも言われ、学生がどのように学習したかを自覚する教育効果があると言われています。

△ デメリット

小テストの作成、収集や管理が煩雑になります。

教育開発支援機構では、こうした課題を解消するためのツールとして「jimonシステム」を用意しています。同システムを利用することで、採点結果の集計・整理、学生への返却といった一連の作業を自動化できます。詳細は「FDハンドブック」をご参照ください。



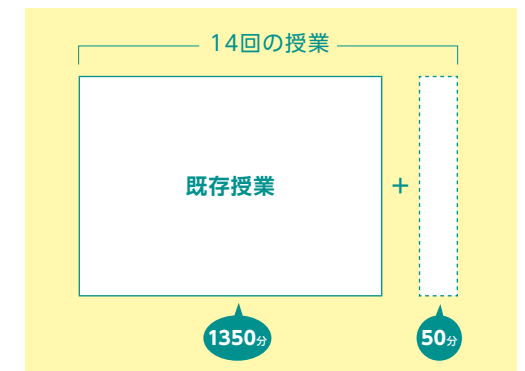
全体+50分型

○ メリット

100分授業制では14回の授業時間の合計が1400分となり、50分授業時間が増えます。これまで時間の制約で教えられなかったテーマをこの時間で教えることができます。

△ デメリット

特にありません。



50分型×2回型

○ メリット

100分を2回の50分授業と想定した構成とします。始めの50分が終了した際には教員および学生の気分転換のためのリフレッシュタイムなどを設けるとよいでしょう。

再構築型に類似していますが、授業設計は再構築型に比べれば容易です。

△ デメリット

再構築型と同様、90分を講義型で授業を行ってきた場合には新たな授業設計が必要となります。

1回の授業

50分

知識伝達型講義

+

50分

グループ学習

単元再編成型

○ メリット

既存の授業が10～20分の単元で構成されている場合、15回の授業を構成していた単元を14回の授業に再配置します。この場合、100分授業制では授業時間が50分増えるので、新たな単元を1～2追加することができます。

△ デメリット

関連性の強い単元が別の週になると学生の理解度が低くなるので、再編成の際にそれらを考慮する必要があります。

n回目の授業

(n+1)回目の授業

既存単元1

既存単元2

既存単元3

既存単元4

既存単元5

既存単元6

+

90分

10分

既存単元1

既存単元2

既存単元3

既存単元4

既存単元5

既存単元6